

身体所有感が共感的反応と利他行動に及ぼす影響

早川美歩

本研究の目的は、他者の身体に関する視覚情報と自己の身体に対する触覚情報の同期によって他者への身体所有感が誘発されるという先行研究の知見を再現すること、この同期によって他者への共感的反応と利他行動が促進されるかを検討することであった。社会的動物である人間は、相互作用を成功させるために他者の心的状態の推論を行う。この時、自分と類似性の高い他者に対しては自己情報を参照するシミュレーションが用いられやすく、そうではない他者には属性や状況に基づく理論が用いられやすい。しかし、日常的に接触する他者で類似性が高いことはめったにないため、他者の心的状態の推論において、デフォルトでは理論を利用するものと考えられる。シミュレーションを行う時には、自分を相手の立場に適用して推論を行うため、相手への共感的反応が生じやすく、結果として利他行動が促進されることが考えられる。したがって、類似性の低い馴染みのない他者に対してシミュレーションを駆動させることは、より良い相互作用の実現に役立つと考えられる。本研究では、身体感覚が認知に及ぼす影響をふまえ、他者への身体所有感によってシミュレーションが駆動され、相手への共感的反応や利他行動が促進されるかを検討した。

本研究の目的を検討するために、身体所有感の誘発方法が異なる2つの実験を実施した。実験1では大学生51名を対象に、参加者と同性で同じ属性（大学生）の他者（以下、ターゲット）が頬に接触を受ける映像に合わせて、同期的に参加者の頬を接触することで身体所有感を誘発した。また、実験2では大学生27名を対象に、参加者の顔の動きに連動してターゲットのアバターを動かすことで身体所有感を誘発した。身体感覚を構成する2つの概念のうち、実験1では身体所有感のみに着目し、実験2では身体所有感と運動主体感の双方に着目した。共感的反応と利他行動の指標として、実験1では第三者罰ゲームとサイバーボール課題を用いて、ターゲットが感情的苦痛を受ける場面での検討を行い、実験2ではこれらに加えて、ターゲットが身体的痛みを受ける場面を見た時の痛み評定と不快感を尋ねた。2つの実験に共通して、視覚情報と触覚情報が同期していた場合に身体所有感が最も高く評定され、先行研究の知見が再現された。また、同期を経験した参加者はターゲットが被った搾取的な分配結果への不満度（共感的反応）と搾取者の制裁のために支払う金額（利他行動）、ターゲットが身体的痛みを受ける場面を見た時の不快感（共感的反応）を最も高く評定した。本研究によって馴染みのない他者に対しても身体所有感がシミュレーションを駆動させる可能性が示された。今後、自分と性別や属性が異なる他者に対しても、身体所有感の誘発によって共感的反応や利他行動を促進されるかを検討することにより、多様化が進む時代で人間が共存するための有益な示唆が得られると考えられる。